時評

短歌のビジョン

谷岡亜紀

先日一九八〇年代の角川「短歌」を調べていて「短歌滅亡論」をテーマとした座談会（83年7月号）を偶然見つけ、懐かしくてコピーして来た。出席者は岡井隆、岡野弘彦、佐佐木幸綱、篠弘、島田修二。その座談会は、近代以降ある時期まで、短歌では十年おきに滅亡論が登場する、という話題から始まっている。

確かに明治の和歌革新運動以来、短歌は内外からの危機感をバネに、現代の詩として自己変革を遂げてきた。それぞれの時代の中で、いつも滅びとの戦いを続けて、危うい綱渡りをしながらなんとか現在まで命を繋いで来たのだった。そうした意識があればこそ、例えば塚本邦雄は皮肉を込めて、短歌は既に滅びて歌人だけが生存していると言い、岡井隆は次世代へ向けた『現代短歌入門』に〈危機歌学の試み〉とサブタイトルしたのだった。

だが現在、短歌滅亡論や否定論に出会うことは皆無で、ただ奇妙な楽観だけが漂う。いや、短歌史に対する楽観／悲観、肯定／否定といった意識がそもそも無いように見える。そして（短歌の未来に大きく関わるであろう）ネット上には、ごく少数の感性の近い仲間に向けて発信された、つぶやきや独り言を思わせる歌が溢れている。それらは、ひたすら〈私の感性〉というシェルターに自足しているように見える。私の疎外感、私の淋しさを自己肯定的に歌う作品の羅列は、痛々しさを伴う。気になるのは、自己を相対化する、自然や社会や世界といったより大きな存在が抜けているように見える点である。やや大づかみな物言いになってしまうが、やはり私はそれが心配だ。彼らの作品は、まさに現在という時代の空気を正確に反映しているという意味で新しい、という物言いがされることがあるが、私はそう思わない。現実を素直に反映し、現実に追随するのではなく、現実を問い直し、現実に返答するのが詩歌の、文学の表現であってほしい。小洒落たウイットや思いつきではなく、人間を問うものであってほしい。間違っているだろうか。佐佐木幸綱の言葉で言えば、表現行為とは世界に「直立」することだと今もって思いたいのだ。ちなみに、もはや自然・人間・社会といった大きな主題は有り得ない、という言い方がされることがあるが、違う。自分でそう決め付けて、見ないふりをしているだけだろう。あの大震災以来、それが再び明らかになって、短歌をめぐる空気もまた変わって来ている。

先日、思潮社の〈現代詩文庫〉から出された『岡井隆歌集』を頂いた。現在までの軌跡をコンパクトに見渡すことができるこの歌集（選歌＝黒瀬珂瀾）を辿ると、岡井隆は随分遠くまで来たという感慨がわく。アララギから前衛短歌、政治の季節を経て、口語脈の（一見）ソフトな思索詠へ。公から私へ。外界から内面へ。発言から、「随想録」を思わせる韜晦へ。やや乱暴だがそれは、現代の短歌の軌跡と或る意味で重なる。前衛短歌のみならず、ライトヴァースやニューウエーブと呼ばれた一連の動き、加藤治郎や穂村弘の登場にも、岡井は少なからず関わって来た。それらは実は、岡井のプロデュースであったとさえ言えるかも知れない。当然そこには、短歌衰退への岡井の危機意識が反映されているだろう。そうした岡井隆の短歌ビジョンを、これからの短歌は選択し続けるか、軌道修正するか。それが直近の課題だと思う。